

## 九月作品

## 月集スバル

☆今月の四人☆ (桑原正紀選)

永劫 高野 公彦 千葉

ベスト着て「これ自」ベストなどといふギャグが浮びぬ疲れた証拠  
あてつけに「犬を飼ひたし」と言つてみる余命分からぬ我自らに  
日本で育ちしツタンカーメンの豌豆食めば永劫思ほゆ  
着信音「水上の音楽」聞こえ遠き脇川を思ふたまゆら

「し」といふは衆しゅうのことにて母の言ひし「男をとこし、女をんなし、子供こどもし」懐し

逆引き 風間 博 夫 千葉

耐湿性防水原紙の塵袋生塵直接投入可能

脚出してくつろいでゐる浅蜷たち疑似海水のボールの中で  
生温いだるい明るいかつたるい「るい」の題詠うれし逆引き

阿弋流アテルイ為は蝦夷の族長、坂上田村麻呂に敗れ惨殺された

逆引きで「るい」引くは狡いあまりにも累々として薄気味悪い

つゆざむ 田中 愛子 埼玉

雨の日をたのしみみるや自転車自転車の親子そろひの黄のカップ着て  
あぢさゐの花まり重し母にしてあげられなかつたことことのあれこれ  
かはうをのすずしさをもち雲水は初夏のゆふべの駅頭に立つ  
かなしみは湯呑みにひそみさびしさは肩掛けにひそみ つゆざむの夜  
皆さまへとあれど誰にも見せません母の文字なる「ありがとうさようなら」

夏の花物の名 水上 比呂美 東京

宿題とプールのあひ間はリコーダの練習をする夏の少年

夏夜明け家々眠るアジア坂星が光るよひとつ、ふたつ、みつ

七月のあかときくたち逢ふひとの紺の浴衣の白き花模様  
パーティーで話の接ぎ穂うしなひて中庭なちやうの池の橋に誘ふ

われはもや年老い藍藻植物の広がる髪に花櫛を挿す

☆ ☆ ☆

水島晴子 兵庫

東京を去る仲間よと呼びかけてうたひ給ひき杜沢光一郎氏  
嬶でうと「出船」をうたふ君がこゑ夜の広間に沁みて徹りき  
おもかげは若き剣士よ白面の十代にして論を譲らず  
「本当の極楽よいま」真情のあかるくあふれ孝子さん言ひき  
今は亡き信徒らが舞ふ詠歌舞ひかなしみ詠みて立ち交じりゆく

武田弘之 神奈川

いつ逝くもよしなどといふ覚悟まだあらず過ぎゆく卒寿の日々が  
学び得ず過ぎし言葉のかぎりなしたとへば「離見の見」「桜まじ」  
「やや」に「兎」「稚」あり「稍」や「漸」もあり「良」さへありて樂し漢字は  
「いい俳句できましたか」と問ふ人に「短歌ですが」と言ひかけて止む  
沖繩の砂糖黍畑梅雨あけて地霊の声す「ざわわざわわ」と

奥村晃 作\* 東京

癌を病む人なきわれの家系なり父方母方、妻の場合も  
壮年の体の癌はバリバリ音立てて増殖するとぞ聞けり  
なぜ急に癌に罹つて程もなく逝きしかポン友長谷川祐次  
われら夫婦互に運よく忝な癌でない又認知症でもない  
若い時期、壮年の時期また老いの最中癌死の歌の友等を悼む

森重香代子 山口

人訪はぬひとりの山居昼過ぎて声出してみる声のさびしさ  
さびしかる六月の昼ことごとと鶏の玉子茹でてゐるかも  
掃き寄せて堆りし樹下の花殻は長き日を経て土となりゆく  
下校後を庭かけまはる隣り家の少年のこゑ玻璃窓にひびく  
隣席に吾夫の文庫本を読む人のをりて海辺をバスは走れり

日影康子 富山

初夏の空と庭の青葉をくきやかに映してつくばひの水の光れる  
夫老いて使はぬ机上に広辞苑七版を置かせて貰ひしばしばひらく  
肩いたみ撫づる手指にごつごつと肩甲骨さはるこのごろ瘦せて  
六月の早き夜明けに思ひ出すカナディアンロッキーのパンフの白夜を  
亡きちちの祥月命日の六月三日は天安門広場のかの日と重なる

古屋祥子 群馬

骨折の身なれど(想ひ)はなほ自由 つばさ求めてさらに翔ぶべし  
親身なる介護かうむるわが身命おのれひとりのものにはあらず  
血管になかなか入らぬ注射針持ち替へ持ちかへナスは吐息す  
体内のどこが狂ふや思ひ出の人物も日にちも場所もゴチャゴチャ  
ペンキ塗り、蛇口の締まり、草刈りも依頼できたり 前途は安心

影山 一男 千葉

宮里 信輝 神奈川

あぢさゐの白き花毬揺れゆれて過去へ未来へわれを誘ふ  
花終へし水木の下にあぢさゐは色うすれつつ鎮もりにけり  
沖繩戦慰霊の日けふ荒川の水はゆたかに海へとむかふ  
甘酸ゆき桜桃食めば恋ひとつ失くせしごととき哀しみ過る  
コロナ禍に甘えて家居する耳に山鳩のこゑ官能を呼ぶ

桑原 正紀 東京

小島 ゆかり 東京

団扇もて犬あふぎつつ散歩する人あり時に自分もあふぎ  
異常気象が常態となるこの星の五十年後を危ぶみおもふ  
今世紀半ばに一〇〇億超えるといふ人類がこの星を壊すか  
殖えすぎた人類淘汰のプログラムならずやウイルスも渠かれの狂気も  
いちにんの狂気が世界大戦を招くかもしれぬヒトラーしかり

狩野 一男 東京

木畑 紀子 京都

変形性肩関節症のクルシミはコロナ禍とほぼ同じ進みぞ  
情け無くおもふと共にクモ膜下出血再発せむとするほど  
あゆみきて郵便局の角曲がり紫陽花群とはち合はせせり  
ウクライナまつたくひどい目に合はせられてゐるけど、大丈夫だよね  
居酒屋が恋しいなんて言はぬもう居酒屋に行くこともなからむ

いちめんが黄に熟れてゐる麦畑農大生の演習地なり  
空青く地上は黄色に熟るる麦ウクライナの景目の当たりになす  
上は青下は黄色の国旗なり小麦産地のああウクライナ  
日没は燃ゆる黄色の麦畑 ロシアの砲下のウクライナを見す  
麦刈ののちはめぐりと同様に水が張られて苗が戦げり

みづからの嘘に追ひつめられて泣く子どものなかのまひまひつぶり  
一日を遊びつくして球根のやうに眠りぬ五歳のからだ  
孫帰りにしめしめひとりコーヒーを飲めばしくしく孫に会ひたし  
健康や平穩なんて滅相もないことばかり祈るこのごろ  
シャワー浴びながら拡がる想像のアサギマダラの海上飛行

青葉闇のぞけばあやしをちこちに定家葛のしろき織光  
慕ひたる女人の墓を蔓で巻き花かざりけり定家卿の魂たま  
暗緑の森は出づべし歩くべし野に夕化粧、月見草咲く  
ましろなる十字の苞をいしずゑに小さき黄の塔立つる葦草  
みなづきの白鬚翁は呪力もて稊粟少年にうまれかはらん

島田 暉 神奈川

本当の心話さぬわれの上天はささやく星の言葉を  
雫にも小さな景を乗せながら悲鳴はつきり落してゆけり  
空襲の炎の中を逃げし吾朝の死体のやうに消えざる  
年一度花を咲かせる桜木も生老病死幹に宿せる  
銀色の水音ひびく相模川日暮れは茜の帯になりたり

大松 達 知 \* 東京

偉くなる、とはどのようなことか偉くなったらと母はいまも言う  
反対を大反対と言ひ換えて父親をちよつと生き返らせた  
英語には〈麦〉をあらわす言葉なし小麦大麦燕麦あれど  
自転車をここに停めさせないためにこの人がいるお金をもらつて  
じつさいの方位とそれは関係なく撞木の先が西方浄土

田宮 朋子 新潟

梅雨空をどんみりうつす風の海潮目もあらず統めびかりする  
船待ちをせし為兼が荒海のかなたに見けむ佐渡の鳥かけ  
夏草のしげりをらむか蕉翁が徒かちで越えにし葡萄峠は  
六月の穫り入れちかき麦はたけ戦車がゆくはおもひみがたし  
青梅雨の空気のごとむ昼さがり天草の心とこ太草たんくさを煮る

津金 規雄 神奈川

簡潔な命令形ふたつ「止まれ 見よ」かつてありにき小踏切に  
池袋の大踏切より開巻す記録魔乱歩の「地獄の道化師」  
「踏切のなきモノレール、駅を出て宙ぶらりんが一気に加速す  
右手に富士、左手に相模の灘見えて揺れるモノレール遊園地めく  
改札を出ればすぐさま展望台ビルの五階の〈湘南江の島〉

小山 富紀子 京都

重なれば異常も日常コロナ禍の街もテレビの戦禍の街も  
戦災の瓦礫にぼつんとぬひぐるみ 生マレル国ハエラベナイノヨ  
空襲が無かつたらねえとまた思ふ残されたもの見て廻りつつ  
蜘蛛の網いのやうに電波が京の空おほはぬころの鐘の音恋ふ  
ああまたと自分を叱るこんなことこんなこととして七十二歳

清水 正子 神奈川

横浜駅コンコースゆくは二年振り擦れちがふ人に年寄を見ず  
日本のサグラダ・ファミリア横浜駅尖塔ならぬ工事つづくらし  
老い夫のサスペンダーを選ぶとき椅子を借りたりデパートにきて  
春いろの小型車ゆくよ六階のカフェは間近に首都高みゆる  
星めぐりさながら夜の首都高の無限ループをゆききたしわれは

小嶋 一郎 佐賀

藤野 早苗 福岡

その焚火法令違反と識る由もなき隣り家の卒寿のばあば

日曜のひと日を懸けて添削の歌にかかはる一〇人一〇〇首

亡き父の算盤据えてひさびさに五桁数字の銭勘定す

里山のあの樹は桜だつたのだ気付きて七日まだ花残す

勝敗はこの身に関はり無けれどもやはり今宵は勝てよホークス

後藤 美子 北海道

橘 芳園 新潟

フンガトンガ・フンガ・ハアパイ噴火して噴煙一万六千余メートル

八千キロ彼方のトンガ噴火して「空振」の波日本まで届く

見ず知らずの遠きくによりもたらさる海底火山噴火の波が

遠きくへの噴火が冷害をひき起こす地球を周回すといふ「空振」

おとろふる体力知力けふ一日ことなく過ぎしを幸とおもはむか

福士りか 青森

鈴木竹志 愛知

キーボードを打ちたがる猫しおしおと紫陽花雨の降る日曜日

人ならば小学生の年頃か邪魔猫すなはち「カマチヨ」猫なり

甘噛みのおとききチクリタ暮れて帰れるわれに猫の正直

子をもたぬ教師に欠ける資質ありと言はれき諸ふことはなければ

毛づくろひ終へてやうやくパソコンの前を退きたりツンデレの猫

ネムノキに睫毛のやうな花ひらき柊二の恋を思ふ季は来ぬ

冬至から夏至へ駆けぬけクロノスの加速するどし還暦真近

この夏を悔いなく生きむ蟬の羽のごとき明石縮をまとふ

まだ脱皮できるよろしと覚めるたびあやしの者に変化し母は

さつきした話またせりたらちねは寸分たがはぬ声調もちて

親鸞展見ずともよしと妻は言ひ常照皇寺の桜見に行く

京の路地角の小寺の山門に子供用自転車立てかけてあり

幕末の志士らが知らぬ京の風鳥丸地下のホームに吹けり

若き日の四年を吸ひて身に残る京の空氣が京恋しがる

下宿せし左京修学院の町に似て坂多きなりわが田上町

堤には椋鳥の仔らのさんざめき散歩の人の話に交じる

椋鳥の仔らの喧嘩もよしとして堤を歩む一人となりぬ

我が妻の朝の日課は野菜らのご機嫌うかがひ今日は胡瓜に

六月の公園内の周遊を楽しみぬるか麝香揚羽は

令嬢が黒の衣装をまとふごとうるはしき蝶 麝香揚羽は

原 賀 環 子 東 京

姉の遺すビスクドールは背もたれの椅子ごとわれの人形となる  
人形に相性あればイヴォンヌとけふも語れりイヴォンヌの眼と  
せいべつの不詳がよくて夜々を壁にかかれる天使像見る  
その人のベッドルームの守護天使、天使は見るや眠るプーチン  
戦争をする貌つきと言ひし日の姉の予言を果たすプーチン

水 上 芙 季 東 京

一人では(IKEA立川)は広すぎて廻上のごとく出口へ向かふ  
吸ひ出してゆくね冬のわが繰り言を圧縮袋の中の布団よ  
BOOKOFFで本を売ったり本売つて身軽な体はつか老いたり  
がしがしともの捨てゆけば来たりけり鳥かごに風が吹くやうな朝  
漫画なら線少なめのほのほの系そんな温泉旅行してます

大 野 英 子 福 岡

ミサイルが飛んでも円が下がつてもナントカのひとつ覚えの(憂慮)  
緑陰のポストから出す一通の手紙ひとりの緑陰となれ  
陽は眩し翳れば風は冷たくて梅雨入りまへの天気せはしく  
太き蛾が網戸をさわがす夏が来た暗き実家のあかり灯せば  
料理することは楽しもしかれどもあさひるよるもあしたもひとり

松 尾 祥 子 東 京

職場にて黙食で食む弁当のひたすら噛めど十分で終ふ  
一人づつアクリル板で仕切らるる机にひと日リポートを読む  
人と人隔てる見えぬ壁ありてマスク外せぬ三度目の夏  
国境は不要と思へど隣家との境界の壁不要と言へず  
親兄弟友人諍ふことなかれ世界平和を目ざすのならば

奥村晃作歌集 令和4年7月刊 二五〇〇円(税別) 送料三〇〇円

象の眼 コスモス叢書第1213篇 六花書林

著者住所 〒175-0092 東京都板橋区赤塚七一五一一六

鈴木竹志歌集 令和4年6月刊 二五〇〇円(税別) 送料三〇〇円

聴 雨 コスモス叢書第1211篇 六花書林

著者住所 〒448-0047 愛知県刈谷市高津波町三十四〇八